

大江健三郎 「核時代の森の 隠遁者」論

楠田 剛士

1

原爆投下後間もない一九四五年八月二四日付の「毎日新聞」は次のように伝えている。

広島においては爆裂地点から半径五^五以内は人畜ならびに一切の生物を壊滅または殺傷せしめてゐる。(略)

長崎にあった工場はほとんど全部壊滅しその残酷性はただに地上の生物に止まらず日とともに地中のみみず、もぐらに至るまで死滅させる事実が判明した。これは地中に入ったウラニウムがラジウム放射線を放出する結果と見られてゐる。

だから爆撃後といへども被害地区を歩くものは人体に何らかの故障を生じつつあるといふ有様で広島長崎ともに今後ここにまた市街を建設して復興することは困難でこれについては米国側においても

広島、長崎は今後七十年間は草木はもちろん、一切の生物は棲息不可能である

と恐るべき事実を放送してゐる。

原爆が落とされた土地には草木も生えないという「七十年生物不毛説」をもつとも早い時期に伝える記事である。この時点では長崎に落とされた原爆がブルトニウム型であることは未だ判明しておらず、本格的な動植物の被害調査は始まっていない。だが原爆によつて一面焼け野原になり、多数の死傷者を出した惨事の只中にあつては、人々には深刻に受け止められたと考えられる。

被爆約二ヶ月後、動植物を対象にした被害調査が、原子爆弾災害調査研究特別委員会の生物学科会によつて行われた。その報告によれば「根や地下茎などから新しい芽を吹き出し、あるいは枝が全くなくなつて焼杭のようになった株の所々から芽が出てくるものが、2カ月後の第1回調査のときでも相当認められた」という。どうやら「被害前に地面に落ちた種子が薄い土層のために害を避けて発芽したもの」らしい。一九五〇年まで観察が続けられた広島では、被爆約一ヶ月後の枕崎台風(九月一七日)の豪雨のために植生の更新が早められたと考えられている。奇形植物が爆心地一キロ圏内で見られたが、数年後にはほとんど見られなくなる。地中のミミズや昆虫等、あるいは直接爆圧を受けていないと考えられる水中の動物が生息していることも確認されている。これらはそこに住む人間にも了解されていたであろう。新しく芽吹いた植物によつて、不毛説は否定されたことになる。

このような植物の、特に樹木の生命力・再生力は、戦後の「復興・平和」の願いと重ねられることになる。例えば広島島の平和公園の被爆アオギリ、長崎の山王神社の被爆クスノキなどだ。生き延びた被爆アオギリの三本のうちの一本は枯死したが、残りの

木は生育し、種子からは新しい芽が出ている。山王神社の被爆クスノキは樹齢四〇〇〜五〇〇年以上ともいわれ、人間一人の生の時間に対して超越的である。「歴史の生き証人」と呼ばれる所以である。現在、市や市民グループによってこれらの「二世」を育て、小中学校などに苗木を送る取り組みが行われている。また長崎原爆で亡くなった少女の母親が城山小学校に寄贈した桜の木々は「かよこ桜」の物語のモデルとして、平和教育の教材として知られている。いずれも樹木の再生力、生命力のイメージと無関係ではない。樹木の生と死、再生、誕生の物語化を通して、人間である私たちの物語が再構成されるのだ。

2

大江健三郎もまた樹木のイメージを積極的に小説に取り込むが、「核時代の森の隠遁者」（『中央公論』、一九六八年八月）では、森の奥で暮らす隠遁者ギーという奇怪な人物が登場する。彼は谷間の人間にむかって「核時代を生き延びようとする者は」「森に隠遁せよ！」と叫んでまわる。なぜなら核時代において「森」に起こっているのは「生命の更新」と「回復」だからだ。

核爆弾と人工衛星とが撒きちらす

放射能の灰とラジオ光線の毒とに

ありとある市 ありとある村の

人間 家畜 栽培物が浸蝕される時

森におこっているのは驚くべき

生命の更新である。森の力は強まり

ありとある市 ありとある村の

衰弱は 逆に 森の回復である。

放射能の灰とラジオ光線の毒こそは

樹木の葉と地面の草と湿地の苔に

吸収されて「力」となるからだ。

樹木と草の葉が炭酸ガスに殺されず酸素を生むことを見よ

核時代を生き延びようとする者は

森の力に自己同一化すべく ありとある市

ありとある村を逃れて 森に隠遁せよ！。

物語の語り手である「ぼく」によって「常識的な言葉に翻訳」された隠遁者ギーの叫び声は、対句やリフレインといった表現が見られる「詩のごときもの」として「整頓」されている。「核爆弾と人工衛星」のある上空と「ありとある市／ありとある村」や「森」のある地上とが空間の上下に対置する。地上の「人間」、「家畜」、「栽培物」は、はるか上空には手が届かない。そこで上空から一方的な影響を受けるわけだが、「ありとある市／ありとある村」では「放射能の灰とラジオ光線の毒」に犯され「衰弱」している。「森」は「逆に」「回復」し「力」となる。この違いも空間の対置を伴っている。末尾の「森に隠遁せよ！」という言葉に強いメッセージ性を保証するのは、この対句とリフレインなのだといえる。

さらに語句を細かく見ていく。「放射線の灰とラジオ光線の毒」とに「浸蝕される時」とはつまり核時代である。その危機を背景にしていることは明らかである。この小説が発表された一九六〇年代、世界の核兵器の総数は三万発を超え、核実験はアメリカ

だけで四六七回、ソ連でも二三四回行われた。核実験による放射能被害は、例えばアメリカによるビキニ環礁水爆実験の「死の灰」が引き起こした第五福竜丸事件が有名である。「人工衛星」も核兵器開発と無関係ではない。吉羽和夫『原子力問題の歴史』（一九六九年七月、河出書房新社）によると、一九五七年十月四日の人工衛星スプートニク一号の打ち上げ成功は「ソビエトのロケットの推力が非常に大きいことを示すもの」であり、その理由は同年八月二六日に実験が成功したと報道されるICBM (Intercontinental Ballistic Missile) 大陸間弾道(ミサイル)のロケットと「人工衛星の打ち上げに使われるロケットが実質的に同じものと考えられるからである」という。命中精度などの技術的な問題が指摘されていたものの、核弾頭をつけたミサイルが一五〇〇マイルから二〇〇〇マイルを射程とする以上、アメリカのみならず世界中の大都市が核攻撃の被害を被る可能性がこの時代に出てきたということだ。「放射能の灰とラジオ光線の毒」を合わせた「毒」は核時代の危機という形として「ありとある市／ありとある村」に広がるのである。「毒」は直接的な被害ではあるが、間接的に人間を脅かす危機感、不安感を与えるものだといいようだろう。

この「詩のごときもの」を叫ぶ隠遁者ギーは、かつて村でもっとも高い教育を受けた一人である。そして戦中、徴兵を忌避して谷間の村から森に「隠遁」した人物でもある。彼がこのような「毒」を谷間の人間に与えるのは「永年の森の奥での生活によって鍛錬された、いかなる暗闇をも見とおす眼」を備えているからだろうか。老年を迎えた彼は永年暮らした森を離れ、谷間に戻り共同体で認められる地位を得ようと画策する。だが谷間の人間からは忌

み嫌われて相手にされず、子供たちからは嘲弄される。そこで谷間の「新しい預言者」となるべく、谷間中で「森に隠遁せよ！」と叫んでまわる。村の災厄を引き受けてきた大女ジンの葬式でも、厄落しの御霊祭でも谷間の人間にまともに相手にされなかつた隠遁者ギーは、穴蔵の底の焚火の中に落下してもなおおびつづける。

隠遁者ギーは真黒のゴム人形のような具合に焼けた、だれており、それは広島で原爆にやられて死んだ村出身の若者の御霊の扮装にまことによく似ていた。谷間の人間のみなが、はじめて隠遁者ギーの説教と深く関わる、もっとも根本的な動揺をあたえられたのはこの隠遁者ギーの死体の眺めによる最後の一撃によつて、たつたとほくは思う。

「広島で原爆」で亡くなつた「若者の御霊」が、核時代の危機を訴えても、谷間の人間にとつては厄落しされるべき過去の問題でしかなかつただろう。一方、隠遁者ギーは「詩のごときもの」を「敵意に燃えさかりながら」叫びまわり、「個人的な原子力エネルギー」で暴れまわつた後、炎に焼かれて亡くなる。隠遁者ギーが原爆の熱線の被害について全く触れていないにもかかわらず、谷間の人間が「もっとも根本的な動揺」を与えられたのは、目の前で被害の実相を突きつけられたからであろう。隠遁者ギーによつてもたらされた「毒」は、谷間の人間に広島原爆の記憶を呼び起こすとともに、危機感・不安感として浸蝕し始める。その「毒」にどう対処するのか。ここではじめて谷間の人間にとつて、自身がこれからどのように生き延びていくのかという問題と、核時代の問題が重なるのである。隠遁者ギーの死後、その後谷間を離れる人間が続出する。その中に都市に向かわず森に向かう人間

も含まれ、彼らが「原始共産主義的共同体」をつくって「新生活」を始めたという噂が流れる。新しい場所を求めることで解毒しようとするわけだ。だが隠遁者ギーのいう「森」は核時代を生き延びることのできる場所なのだろうか。

3

核戦争をシミュレーションし、その影響の調査を報告したスウエーデン王立科学アカデミー編『1985年6月世界核戦争が起こったらー人類と地球の運命ー』（高榎堯訳、一九八三年七月、岩波書店）には、森林への影響の調査が含まれている。米ブルックヘブン国立研究所が行った放射線の調査によれば「樹木は種類によつて放射線に対する感受性が異なっていた」という。つまり感受性が強い樹木ほど、より脆弱な樹木であるということだ。そして「自然の群集中の植物群の感受性は、その高さと同関係がある。森林の中でもっとも脆弱なのはいずれの場合にも、樹木の林冠である。次に弱いのが背の高い低木で、その次に背の低い低木がくる」と述べている。光合成が行われる枝葉に強い放射線があれば、樹木もまた生き延びることはできない。

森林地帯を不毛の景観にかえるのに要する放射線量は、数百から数千のレントゲン程度で、これはすでに現代戦の手に届く範囲内にある。影響を受ける面積は広く、爆弾一個で数十から数百平方キロに及ぶ。すでに大量の爆弾が存在し、カレッジ、小規模の産業や科学センター、さらには個々の研究室までが、すべて核の目標になり得るし、それぞれが部分的

に重複して火球からの爆風や熱線、電離放射線の影響を受けることになる。放射性降下物の降下範囲もまた重複して数百、数千平方キロを覆うようになる。

樹木が壊滅的な被害を受けると土壌の浸食作用が進む。すると蓄積された養分が流出し、いつまでも「森の回復」は訪れない。生命力の強い害虫やネズミなどがどんどん繁殖し、植物相も動物相も激変すると予想されている。「酸素を生む」森は植生を、さらには生態系を支えるが、森はそれ自体のみで生き延びることはできない。

おそらくそういったことは隠遁者ギーには分かっていたはずだ。なぜなら「永年の森の奥での生活によつて鍛錬された、いかなる暗闇をも見とおす眼」をもつていたからである。「森に隠遁せよ！」と説いた隠遁者ギーもまた、森のただけで生活しているわけではなかった。昼間は森の奥に住み、夜は食糧を求め森を下りて谷間を徘徊していた。そして谷間の人間から新聞紙に残飯を包んでもらっていたのである。谷間の人間も、「在」の農家あるいは「スーパー・マーケットの天皇」と呼ばれる朝鮮人が経営するスーパー・マーケットに支えられている。谷間の人間や「在」の人間がいなくなれば、スーパー・マーケットも店じまいするほかない。谷間の出来事を語る「ぼく」も谷間の人間の供物で家族とともに暮らしている以上、谷間を支えるものがなくなれば、谷間―物語世界もまた閉じられるほかない。

隠遁者ギーが「いかなる暗闇をも見とおす眼」で見ているのは、おそらく核時代の「暗闇」のもっと奥深いところではないだろうか。いままも人類を何度も滅ぼすことのできる核兵器が存在する。

しかも一般に眼が届く場所にはない。「ドコカ、ココヨリ他ノ場所」へ向かつて、逃れきれたかどうかは判断できないのだ。私たちは核時代の危機の真つ只中にあつて、同時に判断不能の外部に立っている。「森の御霊」に扮して「森の力に自己同一化」を目指した隠遁者ギーが「詩のごときもの」で本当に言いたかったことは、核時代の狂気からの「自由」はどこにも「実在するものではない」く、彼にとつて森がそうであつたように、他でもない自己に答えを求めなければならぬということだつたのかもしれない。ヒロシマ・ナガサキ以後の核時代の「毒」を敏感に察知して、それを自ら生きる「力」とするあり方が提示されているのである。

注

1 大阪本社版による。但し旧漢字は新字体に直した。
2 委員会は文部省学術研究会議によつて設置され、生物学科会のほかに物理学科学地学、機械金属学、電力通信、土木建築、医学、農学水産学、林学、獣医学畜産学の九科会で構成される。生物学科会は動物、植物、昆虫の三班に分かれ、植物の調査は被爆約二カ月後の十月中旬長崎で、同月下旬広島で行われた。第二次調査は両市と

も翌年四月下旬である。

3 原子爆弾災害調査報告書刊行委員会編『原子爆弾災害調査報告集』第一分冊（一九五三年五月、日本学術振興会）、二二六頁

4 植物の奇形の原因は原爆の放射能の影響である可能性が高いが、他の原因（報告書は例として熱線の高温との複合的な効果を挙げている）も考えられるので断定はできない。

5 前掲『原子爆弾災害調査報告集』によれば、被爆からの再生力は樹木の種類によつて著しく強弱があるという。再生力の強いものは「クス、センダン、ヤナギ、ハリエンジュ、アオギリ、イチヂク、シユロ、ソテツ、イチヨウ、ユーカリ、マサキ、ヤツデ、エノキ、キヤウチクトウ、ツツジ、竹など」。弱いものは針葉樹のスギ、マツの類である。

6 「核時代の森の隠遁者」からの引用は全て「中央公論」（一九六八年八月）による。

7 黒澤満編『軍縮問題入門（第2版）』（一九九九年十一月、東信堂）、五頁、六二頁。

8 『1985年6月世界核戦争が起こったらー人類と地球の運命ー』、二二四―二二五頁。